

諸國  
奇談

# 東遊記

三

					和書門類
一	一	二	二	二	
〇	一	二	四	九	
冊	架	函	號	三	

庫文閣内				
七	一	九	〇	和書類
函	〇	四	三	
架	冊	號	類	

内閣文庫			
番號	和	29423	
冊數	20 ( 3 )		
函號	172	87	

内一〇九一號



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





東遊記卷之三

文武の條

佐々成政越中領事以敵上團長勢屈

お小味方の助舟多事は我城と守り業ト於ふ

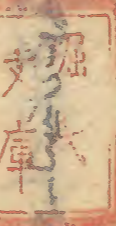
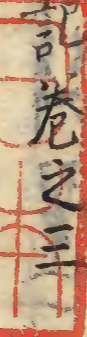
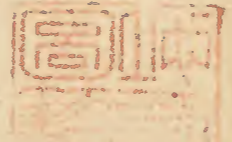
ししと出衆成免ううし淡松の事ありのちあり

たのむははうりく救ふと求んと欲する事とも四

方は敵上團長をて出づと通ふしお命極月廿七

日の事おれは夏は日々にも雪消ぬ我中三山禁よ

了事まうし教丈乃雪封とく禽獸とをいひ



花通家之庫

東遊記

三



る付るは敵も油火くくく山之方へかきまは成  
改修乃を習斗と召具しあひや小城と習て雪  
凍く埋くくく山之絶頂(雪の)とて夫一文字も付  
登る又絶頂より南とくく谷嶺とくく雪の  
よりあつは信州松本(あつ)よりくく河松に結  
えり美たぐく極いと得くくく雪中よま山とて  
越くく艱難中くく言ふはくくく越くく  
と成改がくく越くくく今も雪の者も成中  
善山より信州松本(二)日く向く越くく本くくく

法音の事なりとてくく越の亦ハ破地の人も  
秘くくくく道の通とてくくく山より松本へ  
六七十里も餘るくく一日二日のるに道なり  
けま此を中よままきくくくく  
付ありくくく其の細ハ人跡絶くく極山  
かき草木もいありてくく道とてくく  
ハ新岸絶壁乃ありくく相くくく  
極歎くくく人数も数十丈の雪積る時ハ新岸  
絶壁乃あり一面ハ雪くくくく

東野記  
卷之六  
二



おも雪のときをば身換むるさかしく又大杉喬木  
 いづも昔書に埋まき一面の平地のくく猛獸又は  
 跡隠し穴に位をば人と云ふすこくかしくけし  
 今に地へあびて今今をば谷嶺池川乃るさかふ  
 く高曲に越えさうさうをば中と越中さうさう  
 小つ流さうさうあめりさうさうかめまの兵青の  
 入て尺さにつくたま山乃さうさう越の中初く海の  
 と号い惜りぬ津野領にま津とさうさうの南はさうさう

甲田山といつる高山ありをさうさう参差とさうさう  
 さうさうくかきハお俗ハッ甲田といふ敷山愛宕の  
 さうさうとつもつもつはとさうさうさうさう高山は津野領  
 の人勇をさうさう津野者又津野とさうさうとさうさう  
 お津野の関所も津野所もは板んとすは極月  
 けり二月三月の頃まき甲田山乃津野領さうさう  
 雪けとさうさう一文はさうさう磁石とさうさう南部地は東南  
 の中と志しさうさう方角のあさうさうさうさうさう  
 了とさうさうさうさうさうさうの本道とさうさうさうさう



里七十里或ハ百ありとも路の不便は終日一日二日の間に  
 行方なりけ介は野の外が濱迄解き田邊田邊に  
 も今別ころをさす書中より其山に山登越えて  
 くるに約一里二里五里七里の程ありき  
 而も此の道は雪の積りて行くに難しき事あり  
 其山に皆新樹或ハ無原ありて其山に  
 今も此の山に北地數十丈の雪積りて其山に  
 ありてハ雪は積りて氷く甚く其山に  
 今も此の山に南回し雪の積りて其山に

其の山に皆新樹或ハ無原ありて其山に  
 今も此の山に北地數十丈の雪積りて其山に  
 ありてハ雪は積りて氷く甚く其山に  
 今も此の山に南回し雪の積りて其山に  
 其山に皆新樹或ハ無原ありて其山に  
 今も此の山に北地數十丈の雪積りて其山に  
 ありてハ雪は積りて氷く甚く其山に  
 今も此の山に南回し雪の積りて其山に  
 其山に皆新樹或ハ無原ありて其山に  
 今も此の山に北地數十丈の雪積りて其山に  
 ありてハ雪は積りて氷く甚く其山に  
 今も此の山に南回し雪の積りて其山に



出づる関帝がしめしめ和才の世は人も知る不之又知く  
 將軍の如くは後よ信ひくは京も上系乃折ふ禁裏  
 少く若く人く立はばいぬは景侯の必許い人のを也と  
 一の時中家より又ん来うう赤ふ月うとふぬけて  
 いつこのすまよのたしあゆんと信うと也又年老  
 ける後の信ふ馬上青年過世平白髪多残軀天  
 所許不樂是如何とさしとて文名もふきた將乃  
 詩も多感とさくくさくさばははは孫風子孫ふ

信く吉村つとすえしははす仙乃景言さるる  
 今の太守尼中將重村つともわ方の望えあり去年の  
 中秋東武よりこの信とさる車達よりあぬ世の歴  
 上景くくし月のさき山の遠とさるも軒見計  
 存せり  
 西木 初樹  
 西小原と進といつるは美濃ふ大垣の家の中へ



の武士なりけ人 秘術の妙を傳へけ門人となす者ハ  
 禰と授けらるる系部おもひ禰と傳授し人  
 多し其外には戸おろろを多く語らるも門系多  
 け段に進 秘術の事よ付くも世間多々の事妙の  
 らる多し多くしや信しうききてもあふ小族中に  
 了彼門人は親を失ふとて修せはあふ白しとせ  
 小依小威すくたふしむきまなげ辰に進の父祖  
 小や育る幼年より 秘術よむと多日 夜寝食  
 とりとれて修せしは一夜寝間の禰と嵐の咬る



さや  
 負







積と氣と用りしと或ハ腫むに押あしし又ハ狂  
 と魅せし者と法しそ外争動目と勢と位のと  
 出まるとのしを法皆二平の修けのし又然先  
 の去集し書し歌はくんとする人子そ  
 忠い入るんとそ内よ寐入るる当方の小兒常出  
 其父目とそ折免しと悟しと之ぬまハ  
 小兒もよく寐入るる家門靜く又討つんとすそ小兒  
 啼知れぬとのけしとけしとけしとけしとけしとけし  
 是そ殺氣の毎公の小兒は徹せしと我其理の論ハ

格別先由本はゆけしと依用わすて才と感ん  
 下又彼撰不持の者ハいくと強敵と逆討しとかく  
 こと取中かかく又いとく極歎盛威といへもは備と  
 承持し人よんを付てあことととるはといふ事  
 かくがくといふ事たりやと尋しに何人おも口しよ本  
 の内人しめり獲と身人し終り時先折と約ととる  
 其其誓約の録君よ不忠かすまし親よ不孝ある  
 明友は信と多ふへりは虚言いふは高慢の  
 こと起すへりは次大酒をへりは義と多ふ極のし



公事こうじのありはりてはるるは血ちのたもては夜よのまへ  
 らはは世よの敷しきの乃の條じょう目めありてはとては一いつつもむくこ  
 とありは摩ま利り支し尊そん天てんの御ご四し討たうと共ともありては武ぶ運うん上じやう登と  
 一いつ切きめはかくの工こうの物ものふしては意いのしはけ辭ことばのやむく  
 者ものへまはる人ひと鎖くさり糸いと條じょうの持もちてはるるもそまはるるも  
 鎖くさり乃の手て特とくとまふと定さだめより謀まにむくのてくもまはる  
 正ただ大だい乃の物もの約やくいしは程ほどき鎖くさりあり聖せい人の道みちをいふもは  
 上かみより下したより定さだめは武ぶ運うん乃の奥おく美みとソそふ一いつ法はう華け經きやうの水みづ  
 火かも燒や弱じやくもすすあめりは説せき老らう子しは虎こ豹ひょうも身みと

解かくするなりと教しやくしはふまは外がなるは鎖くさり糸いとの枝えだ  
 のいふくし其その妙めう正ただまありては有ある程ほどき多おほくはと糸  
 と人ひとよまはりて親おやくつてはるるもそまはるるも  
 ましあふまはるるも

丹後の人

奥おく州しゅう津つ輕けいの外がの濱はまに在ありしは示しの役やく人ひとより丹たん後ご  
 の人ひともそまはるるも頻しばしばりしは味あじせし事ことありてはるる  
 心こころ意いはるるに津つ輕けいの志し保ほ山さん乃の神かみ玉たま丹たん後ごの人ひとは  
 志し保ほふりし事ことはるるも丹たん後ごの人ひとは世よに在ありし時ときは天てん氣き











あまのこども陰莖乃形石位門の形石と神體と  
了所の氏神およひけいひあつてたふとひかしてふ  
多う日本は古風よわ神代の巻にの山所或は管令  
の古事お母とくひいけいふる事多ふは神道乃  
秘事よちかふる事もまづいそおふ

屋氣樓

唐玉乃詩文も多うゆふとやまの屋樓と  
いふとあり又海市と古の海とよを結くこと五  
のりく構屋城廓の形とありハ一牛中よ人馬



東海画



倉子堀甲のりあのみんを突間かたのりたもあつた  
 う又皆するに相原めかく餘ふある天の橋立ふら  
 ちよえん一々吾よ乃ひ知うたふまはが漸く  
 矢てたうたもかうありありあつた山よりま終つた  
 陽てりるふちまは城下の人々皆是物たたく足とも  
 何時は結ぶもまきまき又あつたつたつたつたつた  
 昔あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
 津と京の海邊乃人々御幸なりまきまきと二三里と  
 瀧てりる地方の人を一生涯ひひふんづる人多し余ら

越中よりあつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
 て登樓と見るつたつたつたつたつたつたつたつた  
 年次のやせなりつたつたつたつたつたつたつたつた  
 二月あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
 事あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
 引つて戦後はつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
 はつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
 山のあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
 つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた



こもれ余初見唐人乃伝せし詩抄と云ふ  
と屋樓大洋あり事平くして陸地を地入り海  
中法かりしこの中にに降し魚津の地理と云  
に在りしあり次魚津北海小島なる地ありよ京  
の方七八里と云ふ程は能く是國乃山成屏風の  
よ又魚津の海ありありの海あり海中より事  
る陽氣向ふの山は映し下りる形の形と云ふ  
小島は数百あり事と云ふ大海を陽  
氣の向ふと云ふも今ふの高きを映す

一人の月見えと云ふと云ふ小島あり  
海も二十五年の内より多く屋樓と云ふ  
事ありしと云ふも向ふは尾張之河の山と云ふ  
ありと云ふと云ふ又安芸國と云ふと云ふと云  
と云ふ向ふは山ありと云ふと云ふ屋氣樓と云ふ  
事いまだきりた事と好む人きと云ふ月  
の光に映しはるる也

佐渡

我が諸島の付をいつても五戒と云ふ道中記



の初よ大なる書けり毎日を法又く唱く特らして  
 かり其五戒と云ハ流海馮河夜行異食賤妓之  
 此皆務り乃人の最身とあやまし病成るるの  
 のこと志ある人々懼之きくは深くおほし而後  
 今くしと長生と得くくや善を樹と成然し  
 て人必好い後世とあむしと云一ハ五戒乃  
 中し中しと云く公論を侵はゆしと云く其  
 時よ降く是はうき天の祥ふきハおほしき  
 公も起り川越しと云けの賢治やむとけし時

中を中の川何経の事らありとも思ひ途の探  
 会せし人々く日暮ても而後と云く人の地きの  
 志とく下とせん事と親け毒ふかりしてと云れ  
 ぬ憂わしと等と下し諸語深き事と云く病  
 る病も女も一夜と變るたことと云く付と云り  
 くも兼く此かの外ふくくは深きハ大なる事と  
 けり事と云けおふ毎日ふおきと通中記よおけ  
 かりと云くも侵ししと慎事と云るに然後ハ  
 には津よおけりしと云く二月八日ありと云り







出づる年老し船頭一人送り来りて船中はあはれに  
云はれ北乃やま雲少し又月の色もほろほろと  
此程天氣は少しとて神所をたゞ佐渡に渡るに大  
津の海は北より来る中津浦に中途よりあはれ  
も北より来る一佐渡山をくたりても風起すは佐渡  
津新ふしと北道は吹散すも若き者元氣よく  
あはれあはれと云ふと程をいへばいかにや  
氣味よくさき事よりのあはれいかに帆は  
せく山海はみまう程あるよ北の方の雲と天と接せ

あはれあはれと云ふと程をいへばいかにや  
氣味よくさき事よりのあはれいかに帆は  
せく山海はみまう程あるよ北の方の雲と天と接せ  
あはれあはれと云ふと程をいへばいかにや  
氣味よくさき事よりのあはれいかに帆は  
せく山海はみまう程あるよ北の方の雲と天と接せ  
あはれあはれと云ふと程をいへばいかにや  
氣味よくさき事よりのあはれいかに帆は  
せく山海はみまう程あるよ北の方の雲と天と接せ  
あはれあはれと云ふと程をいへばいかにや  
氣味よくさき事よりのあはれいかに帆は  
せく山海はみまう程あるよ北の方の雲と天と接せ



おれせよおれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ  
おれは海に身をまかせしりよはけあつりおれをまてまてふ

け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは  
け事か肝に刻みぬはいつらある事ありとも海のおれは



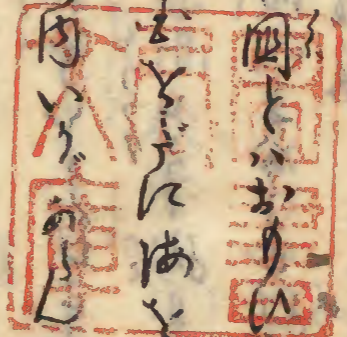
る川ぬよふあふまゝに浅き小限りありぬ北海に  
浮くけ天氣よ逆ひしふ恙なく下りたる淺水なる  
るめるも不思議の事ともふし一も下りて常  
の佐渡より浅口の所ありて繁華地なる海  
中傍に佐渡の浅口の所ありて繁華地なる海  
上も程よく浅く十八里と聞たり又出舟時より四  
里東北に寺ありしとふある世も頗る繁華の地  
かりて寺ありて佐渡の浅口の所ありて繁華の地  
上へけとあむし佐渡の浅口の所ありて繁華の地

一高兼大納言佐渡守配流の村世寺ありて澤に  
了數日風波又ふそりて遠年一好ひりし村に里の接  
女初君とよとあむし初君別とて一  
了和身とよむそむた今に所の中経乃も側よ石  
碑に彫りてありて碑面とてよむしおむし越後の末乃  
白波とてよむし日女有とてよむしけむ初君とありて  
と高兼の公はかろとてよむしとありてけむ初君とありて  
限とてよむしとてよむしとてよむしとてよむしとてよむし  
入とてよむしとてよむしとてよむしとてよむしとてよむし  
入とてよむしとてよむしとてよむしとてよむしとてよむし

東洋通記 卷之十一 三



けきりゆりしき七日間風候待りしは其推し海  
 の寺もあまの誠小越後ふもしりしより鬼伝は  
 とりひかりし我等しりて岸木乃身たおもむ  
 へき四つかりしに鳥貴の身しりて越  
 後とてに海と隔てしは佐渡の島にた遷りて  
 公乃内いりて初君の身た又しにけりてもあつ  
 たりいやりしは後り後り後りなりし



東遊記卷之三終



